

大玉すいかの露地抑制裁培

東北農林専門職大学附属農林大学校 野菜・花き経営学科野菜コース 戸田 芳直

みどり戦略との関連性

地球温暖化への対策として夏季高温に対応した大玉すいか作期拡大

課題設定の理由

私は卒業後、尾花沢で就農し、すいかを生産する。

すいかは、手作業が多く、つる引きの時期等作業時期が集中してしまい、作業者の体力的、精神的負担になっている。また、近年は夏の残暑が長く続くことが増え、直近の5年平均では、9月の単価が8月と同程度の水準となっている。

そのため、私はすいかの9月どりの栽培体系を確立することにより作業時期の分散を狙いたいと考え、本課題を設定した。

試験方法

播種及び定植の時期をずらし、慣行区では5本2果、試験区では3本1果の仕立てとし、収量や品質等を調査した。

試験結果

- 5月に播種した2つの区では初期生育が慣行区と比べ著しく優り、定植から収穫までの期間が慣行区よりも20日程度短くなった。今年は高温で経過したということもあり、5月下旬区において目標とする収穫日より8日程度早くなり、収穫日が8月27日となった。（表1）
- 6月上旬区では、高温により定植後の活着が不良となり、株が枯死寸前となった。その後、生育は回復したが、成育が大幅に遅延した。（図2）
- 6月上旬区のみが9月の収穫となったが、株の生育不良により、平均果重は6.3kg、平均糖度が11.4度となり、収量、品質ともに他の区に比べ低くなったものの、出荷基準は満たした。（表1）

表1 収穫時調査

試験区	穂木 播種日	定植日	収穫日	5株平均		
				果重 kg/果	収量 t/10a	糖度 (° Brix)
5月中旬区	5/16	6/17	8/20	9.1	2.5	14.2
5月下旬区	5/30	7/3	8/27	10.8	2.9	14.2
6月上旬区	6/13	7/17	9/15	6.3	1.7	11.4
慣行区	3/24	5/1	7/25	11.1	6.1	13.7

※株間は全区 80cm

考察及び今後の課

- 本試験では収穫時期は5月下旬区で8月下旬、6月上旬区で9月中旬となった。年次変動を考慮して、就農後9月上旬収穫のための播種時期の検討が必要である。
- 9月中旬収穫となった6月上旬区において、猛暑の影響により生育不良となった。そのため、定植直後の遮光やマルチ色の工夫などの高温対策の検討が必要である。



図1 収穫の様子（8月27日）



図2 高温により生育が劣った株(手前の7株)